様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18592412
研究課題名（和文）虐待防止を目指したグループミーティングの継続参加の効果と支援能力の構造化
研究課題名（英文）Effects of continuous participation in group meeting and clarification of support for child abuse prevention

研究代表者
清水　洋子(SHIMIZU　YOKO)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授
研究者番号：90288069

研究成果の概要：
虐待予防のグループ支援の効果と支援に必要な能力とその重要度を検討した。結果、参加者の効果について「子育て罪悪感」「子どもとの関係」「両親との関係」「共感・受容・孤独感」「対処」に有意な改善がみられ、グループ支援は虐待予防に有効であることが示された。支援者が捉えた参加者側効果は「自己の肯定」73.0%、支援者の効果は「グループ支援の学びが個別支援の関わりに役立つ」67.6%で最も多かった。支援者は支援能力について「事後フォローと評価」を最も重要とし、次いで「事前準備」「当日のグループ運営」の順であり、下位項目では特に「カンファレンスによる振り返りと支援の方向性の確認」、「参加者との信頼関係と動機づけ」、「支援者側の視点からみた効果の共有」を重要と捉えていることが明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,100,000	0	1,100,000
2007 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総　計	3,300,000	660,000	3,960,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：虐待予防、グループ・ミーティング、効果、支援能力

１．研究開始当初の背景

子ども虐待は社会的な問題として重視され、虐待対策は子どもの保護に加えて、親の子育て不安や虐待の早期発見あるいはその恐れがある親への支援が各地で取り組まれている。これらの虐待あるいはその恐れのある養育者に対して個人あるいは家族単位での支援が主に行われてきたが、養育者を対象としたグループ・ミーティングを取り入れた支援が注目されるようになり、保健所や保健福祉センターなどでグループ支援が開始された。しかし、グループ支援の効果について活動報告はみられるものの、効果やその評価方法は明らかにされておらず、支援については試行錯誤を繰り返しながら展開している段階である。研究としての取り組みも浅く、グループ・ミーティングの手法が虐待防止にどのような効果があるのか科学的に検証する必要がある。そこ

で、基盤研究(C)2002～2005年(平成14年～17年）「地域における子どもの虐待防止を目指したグループ・ミーティングの効果に関する研究」清水洋子（研究代表者）の助成を受けて、虐待予防のためのグループ・ミーティング（以下、グループ）の参加者およびその支援者を対象に、グループ支援の効果を明らかにするため研究を実施した。

グループ支援の効果測定をねらいとして、母親自己記入式チェックリストを支援者・専門家らと共に開発し、１年～３年間の継続調査を実施した。このチェックリストはアセスメント・評価シートとして活用できることが実証された。

しかし、虐待予防のグループ支援の方法は多様であり、より多くのグループ支援の参加者に適用しながら効果測定尺度としての信頼性・妥当性の検証、および支援効果を継続的に測定し検討する必要がある。また、グループ支援を効果的に展開するためには、支援者に求められる能力を明らかにする必要がある。支援に必要な能力の構造化と重要度を明らかにすることにより、虐待予防のための支援に関与する専門職の資質向上を図るための方策、専門職育成に有効な情報が得られると考える。以上の背景により、本研究に取り組んだ。

２．研究の目的

(1)本研究の目的は、児童虐待の防止を目指したグループ・ミーティング（以下、グループ）の効果を参加者および支援者側双方の視点から明らかにすること、(2)グループ支援に関与する支援者側に求められる能力を構造化し能力の重要度を明らかにすることである。これにより、支援者の資質向上を図る効果的方法を開発するための一助とする。

３．研究の方法

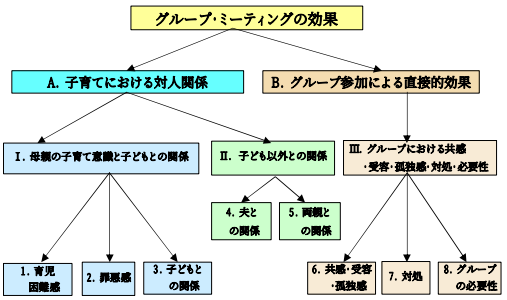
(1).関東、関西圏の保健所、保健センター計４機関において、虐待予防を目的としたグループの参加者（母親）で研究協力が得られた45名に調査を実施し、2回以上継続参加した計29名を分析対象とした。グループ参加の効果を明らかにするため、参加者に支援者（保健師）が主旨を説明して了解が得られた者に個別面接により調査を行った。

調査項目は、自記式チェックリスト、フェイススケール、育児環境の変化、運営に関する満足度、より構成された調査票：シート（平成 14-17 年、文部科学研究費補助金基盤 C 助成により開発）を用いて質的および量的な情報を収集し解析をした。

母親の自記式チェックリストの項目は、Ⅰ．母と子どもの関係：①育児困難感、②子育てに対する罪悪感、③子どもとの関係（虐待、受容、振り返り)、Ⅱ．子ども以外との関係：④夫との関係（振り返り・関係の再構築）、⑤両親との関係(振り返り･関係の再構築)、Ⅲ．グループ参加の直接的効果：⑥共感・受容・孤独感、⑦対処（自己表現・SOS の発信、他者への信頼・資源活用、家事罪悪感)、⑧グループの必要性の３領域計 20 項目（７段階回答 0-6 点）とした。図１参照。

各項目の重要度は、階層分析法を用いた項目間の一対比較調査を支援者に実施し、重要度（重み付け係数）の算出を行い、尺度の回答に重み付け係数を掛け合わせてスコア化した。

図1 グループ･ミーティング
アセスメント･評価項目の構造化



(2).グループ支援に関わった経験のある保健師37名を対象に、①グループ支援により期待される効果、②支援に求められる能力とその重要度について匿名によるアンケート調査を実施した。①②の測定項目は、先行研究[1)]（基盤(C) 平成14年～17年、地域における子どもの虐待防止を目指したグループ・ミーティングの効果に関する研究）により明らかにされた項目に基づいて調査票を作成した。

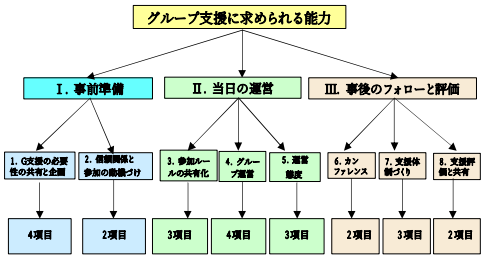
これらの項目の妥当性を検証するため、異なる機関の保健師（グループ支援経験者）を対象に基礎調査を実施し、測定項目の妥当性を検討して最終的に23項目の支援能力項目が選定された。

さらに、支援能力の各項目の重要度を明らかにするため、階層分析法（AHP: Analytic Hierarchy Process）により能力を第１～３階層に構造化（図２参照）し、これに基づいて測定項目の一対比較調査票を作成した。37名中、回答の一貫性を示す整合度C.I値0.1未満である26名を分析対象とした。

分析方法は、グループ効果20項目、母子のフェイススケール、各領域・項目間の関係はSpearman相関分析、Fisher直接法、参加初期と参加後（参加後の最も新しい測定値）の変

化はWilcoxon検定を実施し、SPSS 15.0J を使用し有意水準を5%とした。

図2 グループ支援能力項目の重要度測定のための構造化



(3).本研究で用いる用語の定義は以下のとおりである。
①育児困難:母親が育児を行う上で感じる困難な情緒的感情を指す。
②対人関係問題：子育てにおいて関係する人々に対して母親が感じる困難な情緒的感情を指す。

(4).倫理的配慮：
各自治体・機関の個人情報保護の審査により承認を得て、保健師が参加者にグループ参加とアセスメント・評価シート活用の主旨、回答は自由意志で匿名性を厳守し、回答を拒否した場合でも不利益を被らない、途中で中止するも可能である、事業運営の検討および研究以外には使用しない等を文書・口答で説明し、同意が得られた者に実施した。
事業と効果測定に関わる保健師にはシート活用のマニュアルに基づいて、事前に倫理的配慮およびツール活用の方法と留意点、回答により参加者が自己を振り返ることで予測される心理的影響などへのフォロー体制の必要などについて研修を実施した。情報は個人が特定されないよう番号化された形式で収集し、分析した。

(5).グループ支援プログラムにアセスメント・評価測定を導入する方法を支援者と検討し、次のプロセスで実施した。
シートを活用したグループ支援プログラムは、①参加の決定、②シート活用の説明と同意、③グループ支援開始・参加初期のシート記入、④アセスメント結果の検討と共有化、⑤アセスメントに基づいたグループ支援、⑥中間、最終時期の効果測定、⑦実施後の評価結果の検討と共有化（参加者と支援者、支援者間）、⑧今後の支援方法の検討、の手順により展開した。

４．研究成果

(1).参加者(母親)が捉えたグループ支援の効果について
①子育てに関する母親自身の心理状態を示す「母親フェイススケール」と「子育ての気持ち」には強い相関が示された（１回目調査 Spearman ｒ＝.729 p<.001、２回目調査ｒ＝0.865 p<.001）。
この結果は、先行研究[1)]（基盤(C) 平成 14 年～17 年調査）の結果と類似しており、「母親フェイススケール」は子育ての気持ちと関連が認められ、スケールとして有効性が確認された。

② 「子どもフェイススケール」は参加後改善していたが有意な差はみられなかった。
母親のフェイススケール（p<.001）および子育ての気持ち（p<.001）は参加後有意に改善していた（Wilcoxon 検定）。これらの結果は先行研究[1)]の結果とも共通しており、これによりグループ参加は母親の情緒的心理状態の改善につながると考えられる。

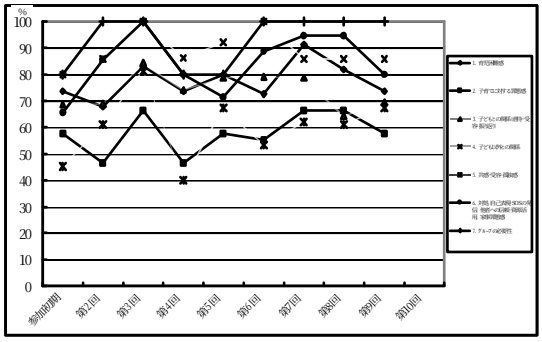
③母親自身が実感しているグループ参加の効果について、「子育て罪悪感（p<.001）」「子どもとの関係（p<.001）」「両親との関係（p<.01）」「共感・受容・孤独感（p<.05）」「対処（p<.01）」領域は参加後有意な改善がみられた。「育児困難感」「夫との関係」「グループの必要性」は有意ではないが改善していた。これらの結果は先行研究[1)]とも類似しており、グループ支援は母親の直接的効果「共感・受容・孤独感・対処」とともに、「母と子の関係」や「子ども以外との関係」の改善にも有効であると示唆された。

④長期的なグループ継続参加の効果について事例分析を行った。
グループに 20 回以上継続参加した事例 A.B（効果測定 A；7 回、B；9 回）の分析結果を例に示す。図３に示すとおり、各効果項目について母親はグループ参加により直線的に改善するのではなく、殆どの事例が経過の中で多少の改善・安定・悪化を繰り返しながら母子関係の安定を保持していることが明らかになった。
以上の結果より、限られた対象ではあるが母親のグループ参加の効果は実証された。また、グループに継続参加することにより、母親の状態変化や子どもの成長の過程に伴う変化に対応し、必要な社会資源につながる機会となっていた。すなわち、グループ支援の効

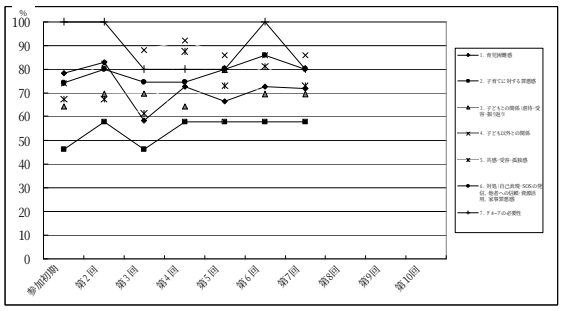
果は直接的な効果だけでなく、グループ支援に参加することで得られる副次的効果も加わり虐待予防につながっていると考える。

本研究の対象は虐待の予備群あるいは今後虐待につながる恐れがある、強い育児不安の母親を対象としたグループの参加者であった。虐待予防をねらいとしたグループ支援は、母親が参加を継続することで、母子関係やそれ以外との関係の改善や悪化予防の効果が期待できると考える。

図３継続参加による７領域効果項目の変化
事例 A



事例 B



(2).支援者（保健師）が捉えたグループ支援の効果(N=37)

①グループ支援により参加者に期待できる効果について支援者が半数以上肯定した項目は、「これでいいのだとほっとした気持ちになる（自己の肯定）」が 73.0%と最も多く、次いで「自己洞察、振り返りができる」「周囲が受け止めてくれると実感が得られる」「自分は何が辛いのか気づくことができる」「話すことで自分の気持ちを整理できる」「参加者自身が成長できる」「皆が聞いてくれる安心感があると深い話ができる」「他者の言葉で封印していた自分の気持ちがほどけて言葉になる」「支援者（保健師）に相談する関係ができる」「活用できる資源を知る機会になる」の順であった。

これらの結果は、先行研究[1)]の支援者を対象としたグループインタビュー調査結果と合致していた。さらに、参加者自身が認めた効果の結果とも類似しており、参加者および支援者の双方の視点からグループ支援は虐待予防につながる効果的支援であることが示唆された。

②グループ支援に関わることで支援者自身が効果を実感している項目は、「グループ支援で学習したことが個別支援の関わりに役立つ」が 67.6%で最も多く、次いで「参加者への観察力・アセスメント能力が向上する」「自己洞察・振り返りができる」「子どもの成長を定期的にみることができる」「支援者なりのグループ参加の仕方があると思える」「母親の事以外にも回りがみえてくる」「相手がどんな事を話し、自分がどう思ったか確認し積み重ねができる」の順であった。

すなわち、グループ支援に関わることで、支援者（保健師）は自身のスキルアップにつながっていることを実感していることが明らかになった。

(3). グループ支援能力とその重要度（N=26）

①グループ支援の能力として選定された 8 領域（図 2 参照）と 23 項目の項目について、支援に必要な能力であると各項目半数以上が認め、支援能力の項目の妥当性が確認された。

②階層ごとに支援能力項目の重要度を検討した結果、上位項目（第 1 階層）で最も重要度が高い項目は、Ⅲ. 事後フォローと評価 0.339 であり、次いでⅠ. 事前準備 0.325、Ⅱ.当日のグループ運営 0.302 の順であった。Ⅲ. 事後フォローと評価の第 2 階層では、「カンファレンス」が 0.358 で最も高く、「参加者・支援者の視点による支援評価と共有」0.315、「支援体制づくり」0.308 の順であった。Ⅰ. 事前準備の第 2 階層では、「参加者との信頼関係づくりと参加者の動機づけ」0.538 が最も高く、次いで「グループ支援事業の必要性の共有と事業の企画」0.428 であった。Ⅱ. 当日のグループ運営の第 2 階層では「参加のルールの共有化」0.348 が最も高く、「運営に関わる態度」0.331、「グループ運営方法」0.301 の順で重要度が高い傾向があった。

第 3 階層の下位 23 項目の中で最も重要度が高い項目は、「個別支援を通して、母親と信頼関係を築く」0.090 であり、次いで「参加者自身がグループ支援を活用する必要性を認知する支援をする」0.074、「カンファレンスでグループ支援の振り返りをする」0.061、「カンファレンスで参加者への今後の支援の方向性を確認する」0.056、「グループ

支援の効果を参加者側の視点から評価し、参加者と支援者で共有する」0.052 の順であった。
以上の結果より、支援者である保健師はグループ支援に必要な能力として、「個別支援を通して、母親と信頼関係を築く」ことを最も重要であると捉えていることがわかった。グループ支援を有効に展開するには、個別支援による対象との信頼関係の構築が重要であることが明らかになった。

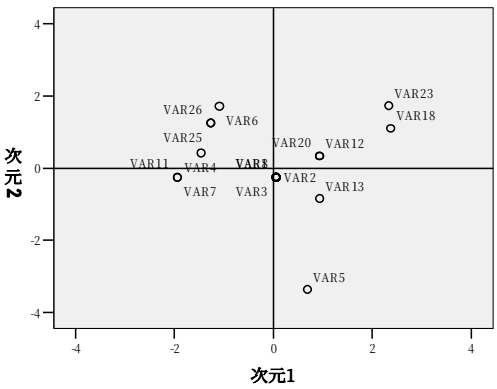
(4). 重要度に影響する要素

重要度に影響する要素を明らかにするため、個人差重み付け多次元尺度法によって個人差解析を行い、因子軸を解釈するために重回帰分析を行った。

第1階層３領域の因子を用いて、個人差重み付け多次元尺度法により個人差を検討した。そして、因子軸パラメータを従属変数とした重回帰分析を行った結果、次元１は領域Ⅰ．事前の準備（β=-15.765、p<0.001）とⅢ．事後のフォローと評価（β=-2.512、p<0.001）が関係し、次元２には領域Ⅲ．事後のフォローと評価（β=-10.552、p<0.001）とⅡ．当日のグループ運営（β=-6.202、p<0.001）が関係していることが明らかになった。

すなわち、尺度の項目によって重要度に個人差があり、その重要度の個人差には３領域が影響している要素であることが明確化した。

図４　個人差 (重み付き) 多次元尺度



(5).アセスメント・評価シートの適用可能性

グループ支援の参加者に対するアセスメント・評価のためのシートの適用可能性について検討した結果、①参加者が自身を振り返ることができる、②参加者自身が変化（効果）を実感できる、③支援者が自身を振り返ることができる、④支援者のアセスメントおよび効果の実感と参加者自身の回答の共通性と相違性を確認することができる、⑤参加者および支援者双方の視点から支援評価が可能であることが確認された。これらは先行研究[1)]の結果で示唆されたことと共通しており、本研究において改めて実証された。

しかしながら、シートの活用については、参加者の自記式回答による心理的影響に対するフォローが必要であること、結果の数値の変化が何を意味するのか慎重に判断し支援につなげる必要があるなど、留意する点があげられる。これらの事項を支援者間で共有しながら支援に活用することが、母親への効果的支援につながると考える。

(6). 研究の限界と課題

限られた対象であるが、保健所・保健センターで実施する虐待予防のためのグループ支援の効果が参加者（母親）および支援者（保健師）の視点により実証された。しかしながら、これらの結果はグループ支援継続参加者のみを対象としており、参加中断者や父親など異なる養育者の視点については明確にされていない。今後、さらに検証していく必要がある。

グループ支援の能力項目別重要度について明らかにすることができた。これらの結果は、事業運営における関係者および参加者にとってグループ支援の重点事項や意義の検討、支援者研修プログラムを開発するための有益な情報として活用できると考える。

グループ支援に必要な能力（個別支援を通して母親と信頼関係を築く、カンファレンスや評価の共有など）について支援者間で共有し、能力の重要度を踏まえた支援者の能力向上と虐待予防の効果的な支援方法を開発することが課題である。

謝辞

本研究においてご協力頂いたグループ参加者の皆様、支援者（保健師・臨床心理士）の皆様、川越市保健センター、愛知県半田保健所管内保健師の皆様、名古屋市管内各保健所保健師の皆様、大阪府保健師の皆様、および研究協力者の皆様に心よりお礼申し上げます。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①村家朋子、山田恵子、清水洋子（10 番目）、虐待予防事業「マザーグループ」の評価と有効性に関する研究（査読付き）、子どもの虐待

とネグレクト（子ども虐待防止学会誌）
9，2、2007

〔学会発表〕（計６件）
① 村家朋子、山田恵子、清水洋子（10 番目）、虐待予防事業「マザーグループ」のとりくみから（第一報）MCG の評価の試みとその有効性、第 28 回全国保健師学術研究会（東京）p222-223、2006.10.12
② 山田恵子、村家朋子、清水洋子（10 番目）、虐待予防事業「マザーグループ」のとりくみから（第二報）　マザーグループの中断・非継続者に関する一考察、第 28 回全国保健師学術研究会（東京）　p224-225、2006.10.12
③ 北野淑恵、加藤恵子、清水洋子（8 番目）、虐待予防を目指した母親へのグループ支援（親支援）における今後の保健所の役割　ほっと・はーと・めいとクラブの取り組みから考える、愛知県小児保健協会学術研修会（愛知）、12-13、2007.2.18
④ 清水洋子、北岡英子、柴田健雄　　子どもの虐待予防を目指したグループ・ミーティングの効果－参加者と支援者側の視点から－、第 10 回日本地域看護学会学術集会講演集（神奈川）p124、2007.7.28
⑤ 清水洋子、子どもの虐待予防のためのグループ・ミーティング支援プログラム開発－アセスメント・評価ツール活用の有効性、第 28 回日本看護科学学会学術集会講演集（福岡）、p538、2008.12.14

〔報告書〕（計１件）
①愛知県半田保健所地域保健課編、清水洋子、平成 19 年度地域保健推進事業　母親へのグループ支援の手引き、愛知県半田保健所、2007

６．研究組織
(1)研究代表者
清水　洋子(SHIMIZU　YOKO)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授
研究者番号：90288069

(2)研究分担者
柴田　健雄(SHIBATA　TAKEO)
東海大学・医学部・助教
研究者番号：30366033
期間：平成 18-19 年
北岡　英子(KITAOKA　HIDEKO)
神奈川県立保健福祉大学・看護学科・助教授
研究者番号：10249063
期間：平成 18-19 年

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者
柴田　健雄(SHIBATA　TAKEO)
東海大学・医学部・助教
研究者番号：30366033
期間：平成 20 年
遠藤　有人(ENDOU　ARIHITO)
東京医科歯科大学大学院・医歯学総合研究科博士課程
期間：平成 19-20 年